

# 和歌表現の包括的解析

「あつき待つ花橘」の和歌を対象にして

小松英雄

Towards a Comprehensive Comprehension of the Expression of Waka Poems  
Composed in Early Heian Period.

Hideo KOMATSU

よみひとしらす  
あつきまつはなたちはなのかをかけはむかしのひとのそてのか  
そする

(題知らず)

詠み人知らず

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

## 前言

①この小論は、『やまとうた』(小松英雄・講談社・一九九四年、以下、「前著」とよぶ)の延長上に位置づけられる。②『古今和歌集』の和

歌は、へみそひともじんの仮名連鎖に結び付けたすべての語句を緊密に関連させて、総合的に表現されている。その構成原理を把握したうえで、個々の和歌の表現を解析する必要がある。小論にいう「包括的表現解析」とはそういう意味である。③『古今和歌集』は編纂された歌集であるから、テキスト言語学の観点から、所与の和歌の「環境」もまた重視される。④以上の理由から、小論の方法は、いわゆる解釈文法に基づく古文解釈の方法と両立しない。⑤小論における表現解析の対象は、右の枠内に示した和歌である。この和歌に異文は指摘されていない(↓西下経一・滝沢貞夫『古今集校本』・笠間書院・一九七七年)。⑥「夏」部の和歌の配列原理に関する検討は、前著の第5章と部

分的に重複するが、内容は修正されている。⑦現行の注釈書にみえる注記や現代語訳を取り上げるのは、表明された見解について検討するのが目的である。従来の研究と方法が異なるために、事実上、すべてが否定的な批判になるので、引用の出自を特定せず、「注釈書」という呼称で一括する。⑧引用文の振り仮名は適宜に削除する。⑨小論の立場からは、伝統文法の用語の多くに「へいわゆる」を冠すべきであるが、煩雑を避けて、いちいち、断わりを添えない。

### 和歌史上の位置

『伊勢物語』に、これと同じ和歌を中心とする説話がある（↓「伊勢物語」）。また、この和歌の引歌は、その後の歌集に少なからず採録されている。『源氏物語』などの仮名文テキストでは、この和歌の引歌だけでなく、散文の叙述にも、この和歌を踏まえた表現が、しばしば交えられている（↓「源氏物語」）。

つぎに例示するのは、平安末期の歌人であり、また、歌学者であった藤原俊成と、彼の娘との和歌である。

たれかまた花橘に思ひ出でむ 我も昔の 人となりなば

〔新古今・夏・題不知・二三八・藤原俊成〕

橘の にほふあたりの うたた寝は 夢も昔の 袖の香ぞする

〔新古今・夏・題不知・二四五・藤原俊成女〕

『徒然草』のつぎの一節の表現も、この和歌についての知識を前提にしている。

花橘は名にこそ負へれ、なほ、梅の匂ひにぞ、いにしへのことも、

立ち返り恋しう思ひ出でらるる

〔徒然草・一九段〕

あとで取り上げる〈解説文法〉の解説書には、この一節について、「この歌が有名になって、花たちばなの香は、昔の人の袖の香がすることになり、（引用略）とあります」と説明されている。

「名におふ」とは、「名にし負はば、いざ言問はむ、都鳥、我が思ふ人は、ありやなしやと」（伊勢物語・九段）という和歌にみられるように、本来、〈名前前にそれが付いている〉とか、〈名称が、それを端的に表わしている〉とかいう意味であった。すなわち、名前に、まぎれもなく「都」とついているのなら、都のことを知っているはずだ、さあ、教えてくれ、都鳥よ、ということである。

「花橘は名にこそ負へれ」の「名におふ」は、右と同じ意味ではない。これを、〈甲といえは乙〉、すなわち、〈甲という名は、そのまま乙を表わしている〉という意味の成句とみなすなら、乙に相当するのは、「いにしへのこと」、ないし、「いにしへのことも、恋しう思ひ出でらるる」であるから、右の解説書にあるように、「花たちばなの香は、昔の人の袖の香がすることになり」という意味になるであろう。

現在、〈名にしおう〉が、〈同類のなかでも特別に有名だ〉という意味の成句になっている事実からみると、右のように理解してよさそうにみえる。しかし、動詞〈負う〉が、事実上、口頭言語から失われた現在と違って、『徒然草』の当時には「名に負ふ」という構成が十分に透明であったから、この結びつきが〈甲といえは乙〉という意味にまで抽象化されていたとは考えにくい。

『徒然草』の右の一節が、「花橘」といえば、その「花橘」で知られ

る、あの「昔の人」を、そして、その人との思い出を懐かしんだ和歌がすぐに思い出される、という意味であるなら素直に理解できる。したがって、この場合の「名」とは、「花橘」というキーワードで知られるあの和歌を意味しているから、この表現によって、「五月待つ」の和歌そのものが参照されていることになる。

以上にその一端を示したように、この和歌は、『古今和歌集』の数ある和歌のなかでも、後世まで、特によく引用されているものの一つであるが、もとの表現はすでに不透明になっている。

### 見かけの印象

この歌集の多くの和歌がそうであるように、この場合にもまた、特に説明を要するほどの語句や表現はないようにみえる。枕詞や序詞は使用されていないようであるし、複線構造による多重表現もないようにみえる。要するに、橘の花の香りをかぐと、かつて親しくしていた人物の袖の香りがする、というだけのことのようにみえる。しかし、へようにみえる」ですませたのでは、和歌の繊細な表現を見逃すことは必定である。

〈詠み人知らず〉の和歌はこの歌集の古層に属しており、素朴な作風であるという学界の〈定説〉に従うなら、この和歌は深い感動の率直な表明として読み味わうべきであって、無い腹を探るような表現解析などすべきではないが、この〈定説〉は、この歌集の和歌の独自な構造に目を覆わせるドグマである（↓前著、第2章ほか）。

『古今和歌集』の和歌は、詠風の特徴を共有する作品として採録さ

れているから（↓前著）、単純素朴にみえるこの和歌の表現についても、正統の手順を踏んだ解凍作業が必要である。

### さ月松

初句の仮名連鎖「さつきまつ」にどういう語句を引き当てるべきかについては検討の余地がある。

藤原定家自筆本のテキストでは、初句の表記が、嘉禄二年本で「さ月まつ」、伊達本で「さ月松」となっている。仮名文学作品には動詞「待つ」が頻用されているが、藤原定家によって校定されたテキストでは、漢字「待」を使用せず、すべての活用形をつうじて、仮名表記になっている。ただし、仮名表記の「まつ」が、動詞「待つ」と副詞「まつ」との両様に読まれる可能性がある場合には、「マツ」を排除するために漢字「松」が当てられている。漢字の意味を捨象して表音的に使用したものである。伊達本の「さ月松」は、そういう事例の一つである。したがって、「さ月松」は、へ五月になったので、まず、花橘の香りをかいだところ」と理解させないための表記である。

定家自筆本のテキストの表記には、誤導の危険が随所にひそんでいるが（↓「前著」序論4）、この場合についていうなら、「五月先づ花橘の香をかげば」と読んだのでは、肝腎の時鳥の影が消えて和歌の生命が奪われてしまうから、「五月まつ」が成り立つ余地はない。

### 不自然な配列

「夏」部には三十四首、「冬」部には二十九首の和歌が収録されてい



「山ほととぎすいつか来鳴かむ」と待ちわびる心を抑える役割を果たしている。したがって、◎▼◎◎◎◎の最初の▼は、理由のある挿入である。しかし、二つ目の▼については、それと同じようには説明できない。橘が夏の花であるというだけで、この一首がこの位置に紛れ込んでしまったとは考えがたい。

「五月待つ」が、まだ、時鳥の訪れる五月まで日があることを意味するとしたら、遅咲きの桜を詠んだ和歌と並んでいるのが自然であるし、「花橘」でまとめるとしたら、七首目にそれがある。

### 五月待つ花橘

『古今集遠鏡』には、「俗言」によるつぎの訳が示されている。同書の「例言」によると、「香ガサ」の「サ」は、係助詞「ぞ」の「いきほひ」を表わしたものであるという。

○五月ニサク橘ノ花ノニホヒヲカゲバ マヘカタノナジミノ人ノ袖ノ香ガサ スル

現今では行き過ぎにさえなっている〈現代語訳〉の、その嚆矢に当たる同書の訳は、逐語訳が基本であり、補足は傍線を付して織り込まむ方針がとられている。現に、この二首まえに置かれた「五月待つ山時鳥」(一二七)の和歌は、「郭公ハ五月ヲ待テ鳴クヂヤガ マダ其五月ニハナラネドモ」と、基本どおりに訳されている。「五月待つ花橘」をこれにならって訳すとしたら、「橘ハ五月ヲ待テ咲クヂヤガ、マダ其五月ニハナラネドモ」とでもなるところである。しかし、この和歌では「五月待つ」の「待つ」が無視され、また、傍線を付さずに「咲

く」が補入されて——または、「咲く」が「待つ」に代入されて——「五月ニサク橘ノ花ノニホヒヲカゲバ」と訳されている。そういう安易な理解に基いて、「橘も五月に咲く花とされてきた」と注記するようでは短絡にすぎ、注釈の名に値しない。

この和歌について逐語訳が放棄された理由を忖度してみよう。

①「五月待つ花橘」とは、〈花の咲く五月を待っている橘〉、ないし、〈五月になったら咲こうと、待ちかまえている橘〉である。換言するなら、〈時節を待って、花を開かずにいる橘〉を意味している。「五月待つ山時鳥」は、そういう意味である。

②しかし、この和歌の場合は、あとに「花橘の香をかげば」とあるから、橘の花はすでに咲いているはずである。

③まだ咲かない花の香りをかくことはありえないから、「五月待つ花橘」の「五月待つ」を「五月待つ山時鳥」の「五月待つ」と同じ意味に理解することはできない。

④「五月待つ花橘の香をかげば」が矛盾した表現でないならば、この「五月待つ」は「五月ニサク」という意味である。

⑤この場合の「五月待つ」は、毎年、五月になるのを待って咲くという意味であるから、「五月ニサク」という訳が適切である。

⑥この和歌では、そういう五月も目前だ、と理解すればよいから、現在、花が咲いているかどうかは関係がない。

右のような筋道で「五月待つ」が「五月ニサク」と意識されたとしたら、優先されるべき言語表現の整合を犠牲にして、論理の整合が図られている。

## 花 橘

『古今集遠鏡』では「花橘」が「橘ノ花」と訳されており、現今の注釈書も、それにならつてゐるが、そのことが、表現解析を大きくつまづかせてゐる。

『万葉集』には、「橘」「山橘」「花橘」という三つの語がみえる。さしあたり、大伴家持の作品から各一例、表記と所在とを指摘しておく。・「多知婆奈」（卷十八・四〇六四）「夜麻多知婆奈」（卷二十・四四七一）「波奈多知婆奈」（卷十八・四一〇一・四一〇二）。『枕草子』にも、これら三つの語がみえる。用例から帰納するなら、「たちばな」は果樹の名称である。山に自生するのが「山橘」であるが、主として、その美しい実が主題になつてゐる。

「花橘」は、「橘ノ花」ではなく、花の咲いた橘の樹をさす歌語である。『万葉集』の多くの用例のなかには、花をさしているとみえるものもあるが、「花橘を宿に植ゑすて」（卷一九・四一七二）など、樹をさしてゐるとしか理解できない事例がいくつもある。なお、後世の作品にみえる「花橘」は、歌語に基づいた雅語になつてゐる。平安時代には、「山橘」を庭に移し植ゑたものではなく、栽培種であつたかもしれないが、いずれにせよ、「花橘」とは、「花桜」と同じように、花盛りの時期の樹の状態である。

「花桜」は用例が少ない。それは、桜の場合、事実上、花だけが関心の対象であり、満開の状態を特に強調する語が「花桜」だからである。それに対して、橘は、美しい実も鑑賞の対象であつたために、花の咲いた状態が「花橘」とよばれてゐる。

「花橘」は、「橘ノ花」ではないから、「五月待つ」という表現についてだけ無理につじつまを合わせたところで、所詮、「五月待つ花橘」が「五月ニサク橘ノ花」を意味することはありえない。

つぎの現代語訳では、「花橘」が、そのまま「花橘」になつてゐるが、橘の花と理解されていることは明白である。原文の表現にない「思いだ」が補われていることについては、香との関連で後述する。

夏の五月を待つて咲く花橘の香りをかぐと、もと知つていた人の袖の香りがする思いだ。

「五月待つ花橘」は、現行の注釈書で、「夏の五月を待つて咲く花橘」、「五月を待つ花橘」、「五月を待つて今咲こうとしている橘の花」、「五月を待つて咲く思いだ」、「五月を待つて咲きはじめて花橘」など、さまざまの現代語訳が示されている。「五月を待つ花橘」という現代語訳だけは、「花橘」が花の咲いた橘の樹をさすことと矛盾しないようにみえるが、つぎに示す和歌全体の現代語訳をみると、それは、原作の表現に手をつけなかつたからにすぎない。

五月を待つ花橘の香を嗅ぐと、昔のあの人の袖の香が、ホラ、におう  
つまるどころ、「花橘」という語を——したがつて、この和歌の表現

を——正確に理解してゐる注釈書は、管見のかぎりで一つもない。

一つの注釈書は、「五月を待つてゐる橘」という現代語訳を示したうえで、「五月待つ」に、「五月を待つて咲く。ここでは、四月の終わりに最初に初めて咲いた花」と注記してゐる。「五月を待つて咲く」はずの橘の花を、「ここでは」と断つて、早めに咲かせてゐるのは、「この橘

の花で四月を終り、さらに五月のほととぎすの和歌に続く」という説明と矛盾させないためである。年によって開花の時期は前後するが、四月に咲いたのに、「ここでは」、どうして、「五月待つ花橘」と表現されているのであろうか。この注釈は、そういう素朴な疑問に答えることができない。

撰者は、時鳥の姿を見え隠れさせながら、四月から五月に自然に移行させている。その流れを堰き止めて、四月と五月との間に一線を画し、その境界に意味があるかのように説明することは撰者の意図に反している。まして、不法に設定した境界に基づいて、橘の開花を臨時に繰り上げたりすることは言語道断である。後述する理由からみて、この和歌は四月の作品であるが、それをもって、右に引用した注釈書の説明が正当化されることはない。

「五月を待つて今咲こうとしている橘の花」という現代語訳を示している注釈書がある。「橘も五月に咲く花とされていた」という脚注からみると、四月末の情景という想定である。しかし、咲こうとしているなら、つぼみの状態であるから、「香をかげば」には続きにくい。

### 枕詞の可能性

「五月待つ」という限定について説明できないとしたら、枕詞に逃げ込む道が考えられる。そのように注記すれば、すくなくとも、水掛け論に持ち込むことが可能である。しかし、この「五月待つ」について、「花橘」の枕詞であるとか、枕詞的用法であるとか説明している『古今和歌集』の注釈書は見あたらない。それは、「五月待つ花橘」という

表現が、『万葉集』にもみえないし、歴代の勅撰集にも、この一首以外には見いだせないからである。現に、二首まえの「五月待つ山時鳥」の和歌では、字義どおりに使用されている。したがって、この場合、残されているのは正攻法だけである。

ここにいう正攻法とは、橘が、なぜ、「花橘」の状態で――すなわち、花を咲かせた状態で、五月の到来を待っていたのか――、その理由を説明することにはかならない。しかし、どの注釈書も正攻法によらず、逃げ道を模索している。すなわち、強引な曲解によるつじつま合わせである。当座の切り抜けに精一杯で、詩的表現としての意味づけなど考える余裕がないようにみえる。

『伊勢物語』の注釈書には、これと同じ和歌の「花橘」に、「五月待つ」、つまり五月を待つて咲く、と冠せられると注記しているものがある。「と冠せられる」とは、「五月待つ」が「花橘」の枕詞であることを意味しているが、無責任な注釈といわざるをえない。

### 橘の開花期

四月のつごもり、五月のついたちの頃ほひ、橘の葉の濃くあをきに、花の色白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世に無う心あるさまにをかし（略）、時鳥のよすがときへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず

この状態が、まさに「花橘」である。「四月のつごもり」は、「へ時鳥の訪れる五月が目前に迫ったその日」であり、「五月のついたち」は、「今日から、時鳥の訪れる五月というその日」である。

この一節から判断するなら、四月の末までには、橘の白い花が咲いていなければならない。「時鳥のよすが」となるためには、咲きはじめではなく、花盛りであるか、それに近い状態がふさわしい。

「時鳥のよすがとさへ思へばにや」という表現の背後には、『古今和歌集』（夏・一三九・一四一・一五五）をはじめとする平安初期の和歌がある。それが、当時の教養人に共通する知識であった。

「五月待つ花橘」という日本語の表現を、「五月ニ咲ク橘ノ花」と理解することは、時間の隔たりを超えて許されない。そういう無理な理解をせざるをえなくなったのは、さきに指摘したように、「花橘」をへ橘の花と決めてかかったからである。思いこみを捨てて読むなら、「花橘」はへ花を咲かせた橘の樹をさしており、「五月待つ花橘」は、へ花を咲かせて五月を待っている橘の樹でしかありえない。それならば、『枕草子』の叙述とも符合する。

### 時鳥の影

「五月待つ」と表現されていても、「花橘」がほんとうに待っているのは暦月の五月が来ることではなく、五月が来ると実現するはずのへなにかであったのではないであろうか。そのへなにかを特定することが、すなわち、右に述べた正攻法にほかならない。

五月待つ 山ほととぎす うち羽ぶき 今も鳴かなむ 去年の古声

〔題不知・詠人不知・一三七〕

山にこもっていた時鳥は、五月になったら里に下りようと、羽ばたきしながら待ちかまえている。五月までは里に下りて鳴かないのが、

当時における——あるいは、当時の和歌における——、時鳥の文化的生体だったからである。

さつき来ば 鳴きも古りなむ ほととぎす まだしきほどの 声を聞かばや

〔題不知・伊勢・一三八〕

五月まで待たず、鳴きなれない声を聞かせてほしいという、実現不能の希望を吐露して、時鳥の訪れを待ちかねる心を表わしている。

けさ来鳴き いまだ旅なる ほととぎす 花橘に 宿は借らなむ

〔夏・一四一・題不知・詠人不知〕

今朝、里に下りてきたばかりの時鳥よ、とりあえず、今宵は我が家の庭の「花橘」を宿りにしてほしい、ということである。庭の橘は、花を咲かせ、芳香をただよわせてあなたを待っていたのだから、そのいじらしい心を汲んでやってほしいということである。

「花橘」が女性として擬人化されているのは、通い婚からの類推であり、訪れる時鳥を男性とみなしたからに相違ないが、この和歌の表現を解析する場合、清楚な花を咲かせた橘の状態が、かわいい花をちりばめた衣装の、可憐な女性の姿に見立てるにふさわしかったことも重視すべきである。もとより、イメージをふくらませて描いた姿であるから、事実として、緑の葉が見えないほど、全体が白く見えたことまでを意味していない。「花橘」が、橘の花でなく、花を咲かせた橘の樹であるからこそ、女性の立ち姿として擬人化が可能であった。

時鳥の宿りとしては、橘のほかに卵の花があった。やはり、白い衣装をまとって待っている。「花橘に宿は借らなむ」という表現の裏に、あちらの卵の花でなく、ぜひこちらの「花橘」に、という含みを読み



取るのは、うがちすぎであろうか。

「宿は借らなむ」の「は」は、へあちこち、立ち寄る先があるだろうが、最後にここに帰って、宿は「花橋」に」という含みである。

宿りせし花橋も枯れなくになどほととぎす声絶えぬらむ

〔夏・一五五・題不知・大江千里〕

「花橋も枯れなくに」とは、へ「花橋」が枯れてしまったわけでもないのに、すなわち、へ花は盛んに咲きつづけているのに」という意味である。宿りをしたこの花橋がきれいに咲きつづけているのに、いたい、どこの花に引かれて、いなくなってしまうのかという、移り気な時鳥に対する不満の表明である。

以上の諸例を総合するなら、①「山時鳥」は、五月になると里に下りてきて鳴く。②時鳥は花をつけた橋の木に宿る。③橋は香りの高い花をつけて、時鳥の訪れを待っており、時鳥もその魅力に引かれて滞在する、という筋書きが見えてくる。

「五月待つ」とは、時鳥の訪れる五月を待つことにほかならない。時鳥を表に立てず、「五月待つ花橋」という表現からその姿を浮かび上がらせているところに、この和歌独自の表現技巧がある。

へ列車の到着を待つ妻」といえば、待っている対象は、列車そのものではなく、列車に乗っているはずの夫である。「五月待つ花橋」は、そういう類型に属する表現であるから、言語感覚を麻痺させずに読めば「待つ」対象は自明であるが、語句の単純な和として和歌を読むと、自然な表現が素直には理解できなくなる。

「五月待つ花橋」は、牽牛の訪れを待ちわびる織女になぞらえられ

る。七夕と違って、一夜に限った逢う瀬ではないが、そのかわり、相手が自分のもとを訪れる保証はないし、移り気な相手が、いつ、よそに行ってしまうかもわからないから、繋ぎ止めるための細かい心配りが必要である。ともあれ、一年ぶりの再会であるから、いつでも時鳥を迎えられるように、きれいな衣装に着替えて待っている。「花橋」が清楚な女性の立ち姿なら、ただよってくる香りは、彼女が心をこめて衣装にたきこめた香の香りである。

「時鳥」が詠み込まれていない「五月待つ」の和歌が、なぜ、この位置に置かれているのか、という疑問に対する答はすでに明らかである。「五月」と「花橋」との組み合わせは必然的に「時鳥」を連想させるから、事実上、この和歌は、時鳥を詠み込んだ和歌と同列にある。したがって、「この橋の花で四月を終り、さらに五月のほととぎすの和歌に続く」という前引の注釈書の説明は成立しない。

つぎの現代語訳も、もとの表現との距離は大きいが、ほかの注釈書と違って、「五月」を「時鳥のやって来る五月」とみなしている。

時鳥のやって来る五月を待ちながら咲き始めた橋の花の香をかぐと、以前に親しくしていた人のなつかしい袖の香がして、そのころのことがしみじみと思ひ出されることだ。

専門研究者の一人が、その限りにおいて的確な解析を提示しているにもかかわらず、あとから刊行された注釈書に無視されている。

#### コノテイション

「花橋」をへ橋の花」と理解したことは、表現解析の大きな陥穽に

なった。「花」も「橘」も、現代語に継承されているために、現代語にない「花橘」を、二つの語の単純な和であると、ほとんど反射的に理解したことによる誤りである。

「花橘」のような死語はもとより、現代語と共通する語句についても、その含みについて慎重でなければならぬ。へなにをさすか、へどういうことをさすか、については、それなりに究明が可能であつても、語句に付随する含みは、同一の言語共同体に属する人たちにしか感じ取れないからである。デノテイション (denotation) が理解できても、コノテイション (connotation) を感じとるのは困難である。言語研究がどれほど進展しても、この壁は破れない。外国語についても原理は同じであるが、現存する言語なら確かめる方法がある。しかし、古典文学作品の用語や表現については確かめようがない。その限界を逆手に取つて、当該語句の含みを、当面の説明に都合がよいように想定したり、断定したりすべきではない。古典文学作品のテキストを読んで、すべての語句や表現の微妙な含みまでの確に理解できたと考えたら、それは、言語についての洞察の欠如と、対象に対する姿勢の甘さを自認することにはかならない。

『古今和歌集』の用語や表現が、日本語として現代語に連続していることは、日本語話者にとって、かけがえのない有利な条件である。たとえば、平安時代の「桜」の花が現在と違つていても、コノテイションは基本的に共通しているから、「桜」を主題とする『古今和歌集』の和歌の表現を現代語の感覚で理解しても、情緒的な含みを取り違えることはない。しかし、デノテイションが現在と同じでありながら、

コノテイションが変化している場合があるので、油断すると、そういう有利な条件が裏目に出て、見えるものまで見えなくなる。以上の一般論を頭において、和歌にもどうだろう。

#### 動詞「かぐ」のコノテイション

「香をかげば」の「香」の語感は上品であるが、「かげば」には下品な語感がともなう。すくなくとも上品な語感ではない。「香をかげば」の「かげば」からそういう感じを受けるのは、現代語の動詞「かぐ」の語感が投影されるからである。漢字を当てて「嗅ぐ」と表記すれば、下品な印象が決定的になる。ほとんどの注釈書で、和歌のテキストも、現代語訳も、そして注記も、一貫して「かぐ」と表記されているのは、下品な感じになるのを、意識的に、あるいは無意識に避けた結果であろう。現代語の「かおり」が芳香をさし、「へにおい」が悪臭の側に大きく傾いていること、そして、漢字の「嗅」が「匂」ではなく「臭」に結びついていることなどがそういう語感を裏づけている。

手元の小型国語辞典④と中型国語辞典⑤とについて、動詞「かぐ」の項目を検索すると、つぎのように説明されている。漢字表記はいずれも【嗅ぐ】である。

- ④ (五他) 嗅覚を働かせてにおいを感じ取る。においを弁別する。  
⑤ (動五) ①鼻でにおいを感じとる。「花の香りを・ぐ」②隠れている物事を探る。「他人の私行を・いでまわる」

解説中の「におい」は、「臭い」と「匂い」とを一括したのであろうが、漢字表記を避けても前者の印象が濃厚である。

藤原俊成女の和歌には、「橘のほふあたりのうたた寝は」と表現されている（↓「和歌史上の位置」）。現代語でも、へにおうへは、受動的に感知する場合に使用される。それに対して、へかぐへは、辞典④に、「嗅覚を働かせて」とか「弁別する」とか説明されているように、においを感知しようとする能動的行為をさす。

においを確実に感知しようとするれば、においのもとに——もしくは、においのもとを——、鼻に近づけてクンクンかぐことになる。そういう行為は、周囲に優雅な印象を与えない。へかぐへを含む表現が、下品になりがちなる理由はそこにある。

辞典⑥では二つの意味に区別されており、①に「花の香りをかぐ」という用例が示されているが、対象が花の香りでも、芳香を満喫する感じではない。品が落ちるのを避けたいなら、へ花の香りを胸いっぱい吸い込むとでも表現するであろう。②の「隠れている物事を探る」となると、事実上、品の悪い行動しか表わさない。

大型国語辞典⑦には、「①鼻でにおいを知る。においを感じとる」という用法の一つとして、「五月待つ花橘」の和歌が引用されている。ほかに現代語の用例が示されていないのは、現代語の意味用法もそれと同じであることを含意している。

特別の条件がないかぎり、和歌には優雅な用語や表現が用いられる。また、この和歌の「香をかげば」が、下品な行為を表現したり、行為を下品に表現したりしているはずはない。

当時は「香・ぐ」という語構成意識が生きており、この和歌にも上品な含みで使用されていると説明するなら、問題は氷解する。しかし、

もつともらしいことが真実であるとはかぎらない。「かぐ」の語構成がへ香・ぐであった可能性は否定できないが、それが唯一の可能性ではない。また、起源はそのとおりであったとしても、平安初期に、そういう語構成意識で使用されていた保証はない。我々の課題は語構成の解明ではなく、用例に基づいて、その含みに迫ることである。

平安時代の仮名文学作品に、動詞「かぐ」の用例はきわめて乏しい。『古今和歌集』と『伊勢物語』とにみえるこの和歌を除けば、『枕草子』の、「蟻通しの明神」の縁起の一節に、つぎの例が指摘できる程度である。その数倍の量にのぼる『源氏物語』には使用例がない。

大きな蟻をとらへて、二つばかり、かしこに細き糸を付けて、また、それに、いまし太きを付けて、穴の口に蜜を塗りてみよと言ひければ、さ申して蟻を入れたるに、蜜の香をかぎて、まことにといと疾く穴の口より出でにけり 「やしろは」

穴の入り口に蜜を塗り、糸を結びつけた蟻を別の穴から入れたところ、蜜の香りをたどって出てきたので、あちらの穴からこちらの穴に糸が通ったという挿話である。外からは見えないので、「蜜の香をかぎて」は想像である。犬が鼻をクンクンさせながら進む行動が連想される。蟻にはふさわしいが、人間にふさわしい行動ではない。

へかぐへには、へイワシの臭いをかいだら吐き気がしたというような用法がある。わざわざ嗅いだのと同じぐらい強烈に感じられるということであろう。本来ならよい香りでも、芳香の限界を超えればこの動詞の領域に入る。

仮名文学作品以外にも動詞「かぐ」の用例は少ないが、用法は、現

代語と共通しているようにみえる。そうだとしたら、「花橘の香をかげば」の「かげば」は、①鼻を近づけて香りをかいだか、②ただよってくる香りを敏感に感知したか、そのいずれかである。ただよってくる香りを感知した場合でも、つぎの瞬間、その香りに惹かれて深く吸い込んだであろう。その場合、第二段の行動が「かげば」と表現される。外見に表われないから、周囲に下品な感じを与えることはない。

### ある一回の事実

「香をかげば」の「ば」の用法について、解釈文法の権威の一人による独自の「解釈」があり、強い支持も表明されている。

「解釈文法」にも、いくつかの異なる立場があり（↓北原保雄「解釈文法の見直し」…『表現文法の方法』・大修館書店・一九九六年）、ここに取り上げるのは、そのなかの一つであるが、以下の検証によって得られる帰結は、立場の相違を超えて当てはまるであろう。

『古今集遠鏡』には、「かげば」が「カゲバ」となっている。注釈書の現代語訳は、ほとんどが「かぐと」である。この構文では、「カゲバ」も「かぐと」も、実質的には同じである。この和歌の表現を解析するうえで、「ば」の用法を特に検討する必要はないが、解釈文法の指向する「解釈」を、明確な根拠をもって否定し、表現解析の正統の方法と手順とを提示するために、あえて、取り上げることにする。

注釈書の一つは、「五月待つ」に「↓一三七」という脚注を加えている。「五月待つ山時鳥」の和歌の「五月待つ」と同じ用法であるということなので、そちらを見ると、「さ月を自分の季節として待つ山郭公よ」

という注記がある。必要な変更を加えてこの和歌に当てはめると、「五月を自分の季節として待つ花橘」となる。確かに、それで矛盾は生じないが、花も実も美しいこの常磐木が、「五月を自分の季節として待つ」理由は薄弱であるし、表現の効果も評価できない。

構文だけに気を取られると、このように浅薄な理解にとどまり、それで満足してしまうことになる。

右の注釈書は、「香をかげば」に、「香をかいだところか」と注記し、第四句以下には、「花たちはなの香に、ふと昔なじみの袖の香を感じてはつとしてくる気持のもの」と注記している。

その注釈書の著者は、「古文読解のための文法」、すなわち、「解釈文法」を解説した著書で、「へ已然形Ⅱば」という結合は、「ましかば」以外、すべて、事実を述べるが、いろいろな意味になる」と述べ、六つの用例をあげて、それぞれに短い説明を加えている。整然とは提示されていないので、以下、筆者のことばでその趣旨を要約する。なお、ここにいる「事実」とは、「仮定」に対する概念である。

①「〜と言ふを見れば、見し人なりけり」（伊勢物語・九段）のよ  
うな用法は、ある時一回の事実を表わしている。

②「命長ければ、辱多し」（徒然草・七段）「筆をとれば、物書かれ、楽器をとれば、音を立てんと思ふ」（同・一五七段）などの用法は、ある時一回の事実ではなく、その事実がある場合には、いつも後述の事柄が起ることを表わしている。

③「へ已然形Ⅱば」の二つの用法のうち、へある時一回の事実を表わす①の用法は、「花咲かⅡば」のような、へある時一回の仮定

を表わす〈未然形Ⅱば〉の用法と混同しやすい。

〔已然形Ⅱば〕(以下、文脈から自明の場合には、単に「ば」とよぶ)の用法について、右のように解説されたあとに、「五月待つ」の和歌が引用され、つぎの説明が添えられている。膨大な量の〈古文〉から、この和歌が特に取り上げられた理由は、判断が微妙な事例だからではなく、巷間に通用している誤った理解を〈解釈文法〉によって訂正できる典型的事例だからのようである。

この歌が有名になって、花たちばなの香は、昔の人の袖の香がすることになり、『徒然草』には、花たちばなは名にこそ負へれ(略)とありますが、『古今集』の歌としては、「香をかぐといつでも」という意ではなくて、「香をかいだら」「香をかいたところが」と、ある一回の事実を述べたもの。作者はそこで、思いもかけなかった昔の人の袖の香を感じて、はっとしている気持ちを詠んだものと解さなければ、歌としてのおもしろさはなくなってしまうでしょう。

『徒然草』からの引用をどのように理解すべきかについては、再述しない(→「和歌史上の位置」)。「古今集」の歌としては「とは、〈原作の表現は〉という意味である。「歌としてのおもしろさ」とは、〈韻文のインパクト〉という意味であろう。

右に主張されているのは、つぎの二点である。

①この場合の「香をかげば」は、〈香りをかぐと、いつでも〉ではなく、〈香りをかいだところが〉という、ある一回の事実を述べたものである。

②「へいつでも」と理解したのでは、韻文としてのインパクトが感じられない。すなわち、韻文の表現である以上、ある一回の事実としての解釈しかありえない。

#### 韻文のインパクト

構文の特徴を根拠にして判別できるなら、こういう問題は生じないが、右の説明から知られるとおり、個々の「ば」がどちらの用法であるかは、後続する句節まで読まなければ判別できない。この和歌の「香をかげば」は、どちらの用法とみなしても、それぞれに無理なく理解できるから、判断が微妙になる。

右の説明は、①が正しいと断定し、②でダメ押しされているが、実際には、②を根拠にしなければ①であるとは判定できないから、②が崩れれば①も同時に崩れることになる。したがって、「香をかげば」の「ば」を「へいつでも」として読んだ場合、韻文のもつインパクトがあるかないかが、右の説明の当否を判断する決め手になる。

古い童謡を一つ引き合いに出そう。この場合は「ば」でなく「ながら」であるが、共通の問題を含んでいる。テキストを現代表記に改めて引用する。

きんらんどんす  
金欄緞子の帯締めながら、はなよめごりまう  
花嫁御寮はなぜ泣くのだろう。

「帯締めながら」には、ふたとおりの理解が可能である。その一つは、①へその動作に合わせて、へその動作と並行してであり、もう一つは、②へそういう状態の姿でいるにもかかわらずである。

古典文法の役割は、右の二つの可能性を指摘することであって、ど

ちらを採るべきかには立ち入らない。多くの人たちはそう考えている。ここは詩的表現であるから、どちらをとるか、各人各様のセンスに委ねるべきであるし、また、委ねるほかはない。しかし、解釈文法の立場としては、そこでどめたのでは存在理由が失われるから、さらに踏み込んで、正しい「解釈」を択一することになる。

庶民の少女たちにとって、金襴緞子のきらびやかな帯を締めた花嫁姿は、夢にも似た憧れであったに相違ない。そういう衣装を現実に身につけた花嫁は、幸福の絶頂にあるはずなのに、泣いているのはなぜだろう、というのが⑧の理解である。そのように理解してこそ、花嫁の複雑な心情に迫る表現になる。④のように、長い帯を体に巻く動作をしつとみなしたのでは、「歌としてのおもしろさはなくなってしまうでしょう」というのが、解釈文法の立場である。しかし、一蹴してしまった、もう一つの可能性には、はたして、韻文のインパクトが感じられないであろうか。

お嫁入りの話がまとまって、いろいろの準備を重ね、花嫁衣装を身につけて、帯を締めるのは最後の仕上げである。これで、いよいよ花嫁に、という段階で万感がこみあげ、金襴緞子の帯を締めてもらう間じゅう泣きつづけているということなら、これはこれで、花嫁の心理を巧みに描いた表現である。

ここでは、この「帯締めながら」を日本語話者の直覚でどのように理解するのが自然であるかを検討しているのであって、どちらが正しい理解であるとか、二つを重ねて理解すべきであるとかいう帰結を導こうとしているわけではない。詩であるから、④と読むか⑧と読むか、

あるいは、(④+⑧)ないし(④×⑧)と読むかは、個人の感性に委ねられる。(④×⑧)とは、相乗効果という意味である。

韻文のインパクトの有無を基準にして、「帯締めながら」の「ながら」についての理解を一方に絞り、それが正しいと主張するのは主観的であるし、なによりも、「文法」の越権である。「香をかげば」の「ば」についても同じことが言える。

#### 「解釈」への疑義

前々節に引用した説明には、すくなくとも二つの疑義がある。その第一は、「香をかげば」が「ある一回の事実」であることが、どうして、「思いもかけなかった昔の人の袖の香を感じて、はっとしている気持ち」を表わす理由になるのかである。この場合、そういう気持ちを表わしているとみなすべき客観的指標がない。疑義の第二は、花橘の香りをかいだ主体がだれであるのか問われていないことである。

「筆をとれば物書かれ」は、だれでも、いつでも、とみなしてよいが、その「へだれでも」には、その筆者と同じ程度の教養と、そして、同じような気質との持ち主ならだれでも、という暗黙の制約がある。

解釈文法の対象は、近世以前の、すべての「古文」である。しかし、未然形接続の「ば」と已然形接続の「ば」とのたどった歴史からみても、『古今和歌集』の和歌の「ば」と『徒然草』の散文の「ば」とが等質であると前提すべきではない。また、「命長ければ辱多し」は「寿則多辱」(莊子・天地)の訓読であり、訓読文の「ば」の用法は仮名文と全同ではない。

「香をかげば」の「ば」をへいつでもとみなして読むにしても、香をかぐのが作者であるのか、不特定多数の人物であるのかによって理解のしかたが別になるから、へいつでもとへだれでもとは切り離して考える必要がある。この和歌の後半の表現は、へだれでもと理解する可能性を許容しない。

へいつでも、だれでもでなく、へいつでも、わたしはとして読むなら、へこの季節が来て、橘の花の香りをかぐたびに、わたしは、この香りこそ、あの人の袖の香りそのものだと感じる」という表現になる。それでも、韻文のインパクトは感じられないであろうか。時鳥も、わたしと同じように、この香を懐かしんで訪れるのだろうかというたぐいの含みを、この表現から読み取ることも自由である。

『古今和歌集』の和歌の表現については、二つの理解が両立する可能性を——すなわち、(A+ⓑ)や(A×ⓑ)という多重表現が意図されていられる可能性を——考慮すべきである。いずれにせよ、作者の感懐をどのように推測するかは自由である。

この解説書では、つぎの例が、「ある時一回の事実」を表わす「ば」のほうに分類されている。しかし、へ群らがるからすが池の蛙をとるたびに」という理解のほうが現実に即している。

からすの群れみて池の蛙をとりければ、御覧じ悲しませ給ひて

〔徒然草・十段〕

解釈文法の専門家が、数ある用例から厳選した事例が、これほど簡単に、反対側に入ってしまうことは、弘法も筆の誤りですませることのできない問題がひそんでいることを示唆している。

〔已然形十ば〕にへ一回的」とへ恒常的」との二つの用法があるという立場をとるとしたら、すべての「ば」を、どちらかに分類しなければならぬ。判別の困難な事例が出てくれば、解釈文法の出番になる。この和歌の「香をかげば」は、まさに、そういう事例として特別に扱われている。しかし、ほんとうに必要なのは、右の立場が、はたして正しいかどうかを疑ってみることである。

真剣に問われなければならないのは、そもそも、どういう目的のもとに、へ一回的」とへ恒常的」とに分類するのかである。甲の用法と認定された事例が、乙の事例であったということでは、分類によって無用の混乱が生じるばかりである。

#### 説明の根拠

「香をかげば」の「ば」がへある一回の事実」であり、この和歌の後半は、「はつとしていける気持ち」を表わしているという右のへ解釈は、いくつかの注釈書に積極的に支持されている。「触発された瞬間の心は、深い愛情であったことを思わせる」と説明している注釈書なども、その一つである。

一つの注釈書は、へ甲先生説」として、「昔の人の袖の香」に、つぎに引用する詳細な補註を加えている。「凡例」の表現からみて、甲先生の直接の「御教示」に基づくものらしい。甲先生とは、すなわち、前節に引用した解説書の著者である。古典文法を重視する一つの注釈書は、へ甲博士説」として、この全文を引用している。

この歌を、花橘の香をかぐと、いつも昔の人の袖の香を思ひ出す

と解する説が、古来おこなはれてゐる。しかし、それは原意でなからう。この時代の人は、嗜みとしてみな香を衣服にたきこめてゐたのであるが、さうした香の好みはおよそ人により定まつてゐたらう。それで「この薫りはこの人」という判断は、親しい人にはすぐつくはずである。ところが、或る日、花橘の香が、思ひがけなくかすめた。「おや、あの人の薫りだ」と思ふ。その瞬間的な懐かしさが、この歌の原意だと思はれる。「香をかげば」の「ば」は、現代語でも「唄をうたへば靴が鳴る」といふやうに、甲の事と乙の事とが同時におこるのを意味する用法で、条件を示すのではない。

提唱者の意に添わない敷衍が含まれている可能性もあるので、文責はその注釈書の著者にあることを確認したうえで、以下には、右の引用を提唱者の考えとみなすことにする。かりに、部分的な歪みが生じていても、〈甲先生説〉として紹介され、〈甲博士説〉として支持されている事実は動かない。なお、後述するように、この和歌の「袖の香」は、袖にたきこめた香<sup>まう</sup>ではない。

最初に検討を要するのは、現代語との対比において提示された。つぎの帰結の妥当性である。

「香をかげば」の「ば」は、現代語でも「唄をうたへば靴が鳴る」といふやうに、甲の事と乙の事とが同時におこるのを意味する用法で、条件を示すのではない。

平安初期の和歌の語法を説明するために現代語を援用することは、万言をついやすよりも効果的な場合がある。しかし、「香をかげば」の

「ば」の用法と、「唄をうたへば（靴が鳴る）」（以下には現代表記で引用）の〈へば〉の用法とが同じであるという説明は、日本語話者の直覚が受け入れられない。そういう説明が正しいはずはない。

歌をうたわなくても靴は鳴るし、歌を歌っても靴は鳴らない。また、〈歌をうたえば、靴がなる〉が、歌ったあとに靴が鳴るのではなく、靴を鳴らしながら歌っていることを意味するなら、「甲の事」と「乙の事」とは同時に生じているから、右の説明に誤りはないが、そういう事実を根拠にして、〈一般に、歌をうたうことと靴が鳴ることは関係がない〉と認定できるかどうかの問題である。その関係についての認否が最初のボタンであるから、かけ違えは許されない。

#### 〈おてつないで〉の文法

〈歌をうたえば靴が鳴る〉とは、右下に示す童謡（第一スタンザ）の一節である。

〈歌をうたえば〉の〈へば〉は「甲の事と乙の事とが同時におこるのを意味する用法」であるという説明が、どういう根拠に基づいてな

おてつないで	野道をゆけば
みんなかわいい	小鳥になって
歌をうたえば	靴が鳴る
晴れたみ空に	靴が鳴る。

されているのかを、解釈文法の立場から追試してみよう。① 〈おてつないで〉のあとの、最初の〈へ切れる形〉は〈鳴る〉であるから、〈おてつないで〉から〈靴が鳴る〉までが一つの文である。② 〈おてつないで〉は〈野道をゆけば〉にかかる。③ 〈野道をゆけば〉を承けることのできる句は、〈みんなかわいい小鳥になって〉と〈靴が鳴る〉



との二つである。④前者の場合には、〈野道をゆけば、みんなかわいい小鳥になって〉と、〈歌をうたえば、靴が鳴る〉という結び付きになる。⑤後者の場合には、まず、〈野道をゆけば、靴が鳴る〉という結び付きができる。これは問題ないが、〈歌をうたえば〉は、承ける句がなくなつて宙に浮いてしまうから、〈野道をゆけば、靴が鳴る〉という結び付きは消去される。⑥後者が消去されるなら、〈野道をゆけば、みんなかわいい小鳥になって〉、〈歌をうたえば、靴が鳴る〉という結び付きが残る。それが、文法的に正しい〈解釈〉である。⑦歌をうたうと靴が鳴るわけではないから、〈歌をうたえば〉の〈は〉は、〈甲の事|| 歌をうたう〉と〈乙の事|| 靴が鳴る〉とが同時におこっていることを表わしている。

この童謡と無関係に、〈歌をうたえば、靴が鳴る〉という結び付きが、日本語の文法規則に合致する文 (well-formed sentence) であるかどうかを議論するとしたら、この表現の正統性が〈文法的に〉否定される可能性はないであろうか。

伝統文法の用語で規定するなら、〈歌をうたえば、靴が鳴る〉の構文は条件表現である。しかし、この場合には、二つの事柄が互いに無関係に生じているから、条件表現として意味をなさない。すなわち、形式的には hypotaxis であるが、実質的には parataxis である。そのように判断するなら、⑥の帰結は、つぎのように変更される。

④の場合、〈歌をうたえば、靴が鳴る〉という条件表現は意味をなさない。また、⑤の場合、〈歌をうたえば〉を承ける句がないのは不都合である。④も⑤も成り立たないから、この童謡の歌詞は日

本語として意味をなさない。

しかし、現に、童謡の歌詞がそうなので、正しさが無条件に是認され、文法的に正しい〈解釈〉が消去法で導かれている。

条件表現であろうとなかろうと、この童謡の歌詞は日本語話者の感覚ですなおに理解できる。したがって、問題があるとしたら、それは〈文法〉のほうであるから、①から③までの過程を再検討してみなければならぬ。

修飾句と被修飾句とが一对一の関係にあることが、伝統文法的前提である。一つの修飾句には修飾される句が一つしかありえないから、〈野道をゆけば〉のように、修飾する可能性のある複数の句がある場合には、より適切と認められる候補が択一される。

右の検討では、〈野道をゆけば〉を承ける候補として二つ句があり、後者が適切であると認定された。ただし、この場合の適切とは、伝統文法の用語で都合よく説明できるとか、そういう説明で切り抜けられるとかいう意味である。解釈文法にとって大切なのは、構文が整然と説明できること、そして、その説明にそつて現代語訳ができることであるから、この童謡を歌ったり、聞いたりした場合、日本語話者がどういう理解の過程を経るかは問題にされない。

#### 場面設定

日本語話者は、たとえば、つぎのような過程でこの童謡の歌詞を理解する。①子供たちは仲よく手をつないで野道をゆく。②野道をゆきながら、子供たちはみんなかわいい小鳥になる。③小鳥になったつも

りの子供たちは、野道をゆきながら、楽しく歌をうたう。④楽しく歌をうたいながら元気に歩く子供たちの靴音が、あたりに響く。

伝統文法の構文規則と無関係に、〈野道をゆけば〉は、まず〈小鳥になつて〉を修飾し、つぎに〈歌をうたえば〉を修飾し、最後に〈靴が鳴る〉を修飾する。換言するなら、〈野道をゆけば〉は、〈小鳥になつて〉で立ち止まり、〈歌を歌えば〉で立ち止まったあと、〈靴が鳴る〉で落ち着いている。これでメインの表現が一段落したあとに、晴れわたった空に子供たちの靴音が高らかに響きわたる、という一節が加わり、余韻を残して終わっている。修飾句を承けるべき最適の被修飾句を選択するために、文末まで辛抱よく認定を保留し、慎重に判断して決定すべきであると考えるのは、国文法中毒患者である。

この文における接続助詞〈へば〉を、日本語話者のすなおな感覚でとらえるなら、〈おおてつないで、野道をゆけば〉は、この童謡の〈場面設定〉、ないし、〈状況設定〉になつている。〈歌をうたえば〉の〈へば〉もそれと同じである。すなわち、〈おおてつないで野道をゆけば、みんなかわいい小鳥になつて歌をうたえば〉という、さらに進展した状況が設定されている。この童謡を歌いながら、子供たちはそういう場面や状況を頭に描き、自分もそのなかの一人になる。子供たちはみんな小鳥になる。みんなが楽しく歌をうたつて歩いてゆくと、自分たちの高らかな靴音が空に響いて聞こえてくる、という展開である。

接続助詞という名称にこだわると、〈歌をうたう〉と〈靴が鳴る〉とを〈へば〉が関係づけているはずだと考えるが、文法用語が機能のすべてを適切に覆っているとは限らない。

接続助詞が前後の句節をどのように関係づけるかについては、あらかじめ選択肢が与えられている。どの選択肢にも当てはまらなければ、前項と後項とは因果関係で結ばれていないから、その〈へば〉は、接続関係を表わさないか、さもなければ、所与の文が、日本語の文法規則に合致しない非文 (ill-formed sentence) であると考えざるをえない。

〈歌をうたえば、靴が鳴る〉は、非文であるはずはないから、接続関係を表わしていない可能性が浮上する。「甲の事と乙の事とが同時に起こるのを意味する用法で、条件を示すのではない」という帰結は、そういう筋道で導かれている。その趣旨を敷衍するなら、〈へば〉が、つねに条件を示すとはかぎらない。このように、同時に起こることを意味する用法もある、ということである。

接続助詞が接続関係を表わすとは限っていないにしても、接続関係を表わしていないから、「甲の事と乙の事とが同時に起こるのを意味する用法」であるのみならずは短絡である。

右には、この童謡の〈へば〉を〈場面設定〉とか〈状況設定〉とかいう用語で説明したが、そういう概念を導入した場合、「条件を示すのではない」と認めるかどうかは〈条件〉の定義しだいである。〈酒も飲めば、タバコも吸う〉といった表現もある。〈酒を飲めば、タバコを吸う〉となると事情は別になるが、〈へば〉の用法の違いとしてそれを説明するのは適切でない。

「香をかげば」の〈へば〉が「甲の事と乙の事とが同時に起こるのを意味する用法」であると説明するなら、裏付けとして、なるべく近い時期の、そして、質的にもそれと共通する文献にみえる類例を提示す

るのが、帰納を重んじる伝統文法の順当な手順である。しかし、ここでは、「現代語でも」として、へ歌をうたえば靴が鳴るが引き合いに  
出されている。こういう唐突な説明になったのは、『古今和歌集』の和  
歌をはじめとするへ古文のなかに、類例が容易に見いだせなかった  
ことを意味している。

### 文脈による条件づけ

一般的にいうなら、花橘の香りをかぐことと、「昔の人の袖の香」を  
思い出すこととの間に因果関係はなかった。そして、これも一般的に  
いうなら、歌をうたうことと、靴が鳴ることとの間に因果関係はない。  
「香をかげば」の「ば」とへ歌をうたえばのへばとは、一般論の  
レヴェルで結び付くから、「現代語でも」という比較は正しいようにみ  
えるが、「香をかげば」もへ歌をうたえばも、一般論ではなく、それ  
ぞれ、特定の文脈のなかに置かれている。

ほかならぬこの和歌の作者が、そのときに、「花橘」の香をかいで思  
い出したのであるから、この「香をかげば」は、ある一回の事実を述  
べたものであるというのが、解釈文法にいうところのへ解釈である  
が、その論法は飛躍している。なぜなら、個人に特有の反応であつた  
にしても、彼にとっては、それがへいつでもの反応でありえたから  
である。へ彼女の名前を聞くと吐き気がするというのは、過去の経験  
を踏まえた、特定個人の反応として、へいつでもである。だが花橘  
の香りをかいたのか、その主体が問われていないことに疑義を表明し  
た理由はそこにある。

ふつうなら、歌を歌っても靴は鳴らない。しかし、へ歌をうたえば、  
靴が鳴るという一節は、先行部分を承けている。小鳥になつたつも  
りの子供たちは、仲良しの友だちと手をつないで、歌をうたいながら  
野道を進む。当然ながら足は弾む。靴の音がする。それがまた、うれ  
しくてたまらない。この童謡が作られた当時、子供たちは、日常の生  
活に靴など履いていなかった。

楽しいから歌をうたう。歌をうたえば心が弾む。心が弾めば足も弾  
む。足が弾めば靴が鳴る。それがうれしくてたまらない、ということ  
であるから、詩の表現としては、へ歌をうたえば、靴が鳴るとは、ま  
さに、歌をうたうから靴が鳴る、という因果関係を表わしている。し  
たがって、「甲の事と乙の事とが同時におこるの意味する用法で、条  
件を示すのではない」といふ説明は空疎にすぎる。へ歌もうたえ  
ば、靴も鳴る(鳴らす)とすれば、前項と後項との関係は変わる。へば  
だけに注目せずに、まとまった表現として解析すべきである。

この童謡の第二スタンザの構成  
は、右下に示すように、第一スタ  
ンザとほぼ並行している。前項と  
後項との間に因果関係がないとい  
う理由で、へ歌をうたえば、靴が鳴  
るを条件表現ではないと説明する  
としたら、へ跳ねておどれば、靴が  
鳴るも、因果関係を表わす条件表現ではなく、「甲の事」と「乙の事」  
とが同時に生起していると説明しないと釣り合いがとれない。

この童謡の歌詞は、特定の句が特定の句を修飾するという緊密な構

花を摘んでは、おつむに挿せば  
みんなかわいい兔になつて  
跳ねておどれば、靴が鳴る。  
晴れたみ空に、靴が鳴る。

文になっていない。それが詩の文体であり、その特性は口頭言語とも、そして、『古今和歌集』の和歌の構文とも基本的に共通している。

### 話線

「香をかげば」のような用法は順接確定条件とよばれ、一回的条件を表わす場合と恒常的条件を表わす場合とに分けられる。さきに引用した解釈文法の解説書では、この事例を、一回的の側に属する——しかし、前項と後項との間に因果関係のない、したがって、条件表現ではない——特殊な用法とみなしている。

前節までは、ひとまず、解釈文法と同じ土俵で検討してみたが、一回的と恒常的という分類に重大な疑問のあることが判明した。

言語表現は、話線にそって順次に理解される。その原理は書記テキストにも当てはまる。したがって、後続する部分の叙述と照合しないと意味が確定できない言語表現の類型は原理的に許容されない。この和歌の場合、「五月待つ花橘の香をかげば」までで、それなりの理解が成立しなければならぬ。後続する句節を読むまで、「ば」の用法が確定できないとしたら、それは、接続助詞「ば」に、そのような区別を表わす機能がないからであって、「已然形十ば」が「いろいろな意味になる」わけではない。話線を無視した解釈文法の「へ解釈」は、言語運用の基本に違背している。

### 香をかげば

優雅な文体の仮名文学作品のテキストに「かぐ」の用例が乏しいこ

とや、『枕草子』にみえる「蟻通しの明神」の挿話における使用例などからみて、平安時代の「かぐ」は、現代語の「かぐ」と、意味も含みも共通していたようにみえる。そうだとしたら、「香をかげば」は、「或る日、花橘の香りが、思ひがけなくかすめた」のではなく、「花橘」を見つけて、香りをかき取るうとしたことを意味している。香りがかすめることは、「香りがする」と表現される。「袖の香ぞする」がそれに相当する。「かげば」とは、その香りを求めて、「かぐ」ための行動をとったことを意味している。視覚が先行しても嗅覚が先行しても、結果として、「香をかげば」という行為は同じことになる。

花の咲いた橘の樹を見つけてそばに寄り、香りをかいだら、かつて親しんだ人物の袖の香りがした、というのは正しい理解の一つである。ただし、それが、可能な唯一の理解ではない。この和歌の作者には、橘の花の香りに結びつく特別の思い出があつて、橘の花の咲く季節を心待ちに待つており、香りをかいでは、これが「昔の人」の袖の香だ、と思ひ出にひたっていた、と読み取るなら、いっそう味わいが深くなる。古典文法の区別を当てはめるなら、前者は一回的としての理解であり、後者は恒常的としての理解である。しかし、二つの理解は、互いに排除し合う関係にない。という以上に、(㊸+㊹)として解析しなければ和歌表現の十全な解析にはなりえない。

「昔の人の袖の香ぞする」という表現は、橘の花が咲く季節になると、「昔の人」が、その花を袖に入れて自分を迎えてくれたことを示唆している。「袖の香ぞする」の「ぞ」は、あの人の袖の香そのものだという確認である。「昔の人」の懐かしい思い出は、「瞬間的な懐かしさ」

の対極にある。

この和歌では、奥ゆかしい女性との思い出を懐かしむ心が、花の香りをかがせる動機になっているために、動詞「かぐ」にともなう下品な含みが中和され、作者の切ない心情が共感をよぶ。和歌になじまないこの動詞を、みごとに使いこなしている技量はさすがである。

作者にとって「昔の人」が、どういう存在であったのか、また、どういふ人柄の持ち主であったのか、そのイメージが、このような表現解析から明確になってくる。なお、「袖の香」が、袖にたきしめた香ではなく、袖に入れた橘の小枝の、花の香りであることについては後述する（↓「袖の香」「伊勢物語」「源氏物語」）。

### 花橘の香をかげば

現今の生活で、橘は身近な植物ではないから、名称だけで実物は定かでない人たちが多い。そのために、この和歌の表現も、花を咲かせた橘の姿がイメージされることなく、ことばのレヴェルで観念的に理解されやすい。「五月待つ花橘」について恣意的な解説がなされ、ほとんどの注釈書に蔓延しているのも、表現が観念的に操作されているからである。柑橘類の「橘」からミカンやユズなどを連想しても、その樹形や、開花から結実までの過程を親しく観察する機会のある人たちは多くない。イメージがわからないばかりに、繊細な和歌表現が文法にねじ伏せられる。

平安時代の人たちは橘の樹が身近にあったから、実景に接して作られた和歌でなくても、作者の脳裏には清楚な白い花をつけた橘の樹が

イメージされていたし、読む人たちの脳裏にも、同じイメージが反射的に喚起された。したがって、女性としての擬人化も素直に伝達されただけである。

「花橘」に先行する「五月待つ」が、この和歌の表現を構成するインテグラルな構成要因であることが認識されず、「花橘」の意味とともに誤解されたままになってきた。また、かいだのが、「五月待つ花橘」の香りであることも、ほとんど無視されてきた。端的にいうなら、第二句までは、これまで、事実上、表現解析の対象とされていない。かりに、「我が宿の春待つ梅の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という和歌を示されても、注釈書は、意味をなさない表現であることに気づかず、花の名を入れ換えるなど、必要な変更を加えて、この和歌と同じ説明をするであろう。しかし、平安時代の人たちには、「五月待つ花橘」とは、花を咲かせて時鳥の訪れを待つ可憐な女性の立ち姿としてイメージされた。したがって、「花橘の香」とは、とりもなおさず、その女性の衣裳からただよう芳香であった。

### 昔の人

「昔」とは、現在と心理的に隔てられた過去をさす語であり、こういう文脈に用いられれば、懐かしさがともなう。「昔の人」は、文脈しだいで、特定の人物でも不特定の人物でもありうるし、男性でも女性でも、また、同性でも異性でもありうる。

小論の冒頭に引用した「たれかまた花橘に思ひ出でむ、我も昔の人となりなば」という藤原俊成の和歌における「昔の人となりなば」を、

多くの注釈書は「死んで、過去の人になつたなら」と理解している、確かに、それも許容される理解の一つには相違ないが、ほかの可能性をすべて排除してしまうのは、いかにももつたいない。たとえば、第四句の「我」を若い女性として読むなら、原歌との関連はいっそう密接かつ微妙になつて、へ本歌取りの表現効果が増幅される。俊成の作品であることは、「我」を女性として読むことを拒否しない。「昔の人」という表現に広がりを与え、さまざまの理解を可能にする表現であるところに、『新古今和歌集』の和歌の本領がある。個々の語句のイメージや表現の含みが原歌と異なつていても、新しい歌風に合わせた意図的なデフォルメがありうるので、原作の表現が誤解されると即断すべきではない。

花橋を訪れる時鳥は若い男性であり、待ちわびる花橋は若い女性である。つぎの和歌の時鳥も、やはり男性である。

ほととぎす 汝が鳴く里の あまたあれば なほうとまれぬ 思ふものから  
〔夏・一四七・題不知・詠人不知〕

時鳥よ。あなたの鳴く里は、あちこちにあるので——すなわち、あなたは、あつちこつちの里に出かけてはよい声を聞かせる浮気者だから——うとましい気持ちがあぐいきれません。好きなことは好きなだけ、ということである。

男女の情愛を主題とする和歌は、双方の立場に擬して理解できるものが少なくないが、時鳥のこういう役回りからするなら、花橋の香りから思い出される「昔の人」は女性でしかありえない。以前にかよつたことのある、そして、なんらかの事情から縁の続かなかつた、忘れ

られない女性である。

「昔の人」に、「以前に情交関係にあつた」と頭注を加えた注釈書があるが、これは、表現の基本を取り違えている。この和歌では、肉体交渉をもつた女性としてではなく——すなわち、肉体交渉の記憶と直接には結び付けることなく——、繊細で奥ゆかしい心くばりの女性性として懐かしく回想されているのであつて、露骨な事柄の婉曲な表現ではないからである。

#### 袖の香ぞする

「袖の香」について、一つの注釈書に、つぎの説明がある。

この時代の人は衣服に香をたきこめていたのであるが、その人は橘の花の香に似た香をたきこめていたのである。「伊勢物語」六〇段はこの歌を利用して作つたものである。

衣服に香をたきこめるのは上流階級の人たちのたしなみであつたが、橘は香の素材ではなかつたようである。右の注釈書も、橘そのものでなく、「橘の花の香に似た香」であつたと考えている。「袖の香」に、「袖にたきこめた香の香り。橘の花の香りに似ていたのである」という頭注を付した注釈書も、それと同じ立場である。

「袖の香ぞする」を「袖の香りがする思いだ」と現代語訳している注釈書があることをさきに指摘した。へそのものではないが、まるで、そのものに接する思いがする」ということである。もとの表現にない「思いだ」が添えられたのは、つぎの注釈がそうであるように、たきこめた香であるという思いこみがあるためである。

平安時代の貴族社会では香が発達し、それぞれの好みにしたがって調査し、愛用していた。この人の衣の袖にたきしめた香は、個性的な性質をもっており、その花橘の清潔な気品のある香気をか

ぐと、懐かしい恋人を思い浮かべたのが、この歌の心である。

要するに、「昔の人の袖の香」とは、その人物の好みで調査した独自の香りであり、その香りが——あるいは、その香りに象徴される上品さが——、橘の花の香りにそっくりだということである。

『源氏物語』などにも、香をめぐる叙述は少なくないし、「たきもの」「そらだきもの」、「たき・しむ」「たき・にははず」というたぐいの語句も随所に見える。しかし、そういう知識と短絡させずに、和歌の表現を熟視すべきである。現実の事実がどうあろうと、和歌の表現解析にとって大切なのは、どのように表現されているかである。

橘が香の素材でなかったとすれば、「その人は橘の花の香に似た香をたきこめていたのであろう」と考えるほかはない。前提を動かさないなら、それが唯一の可能性である。

「袖の香ぞする」とは、へまさに、あの「袖の香」そのものの香りがする——という意味である（↓「香をかげば」。すなわち、同一性の確認であって、「橘の花の香に似た香」という類似性の指摘ではない。助詞「ぞ」のふつうの用法であるのに、多くの注釈書が正しく理解していないのは、右の思いこみに起因している。

柑橘を素材とせずに、柑橘に特有の、あの甘酸っぱい香りにそっくりの香を調査できたかどうかは、はまだ疑問であるが、香もまた現今の日常生活と無縁になっ

ているために、当時の習慣に関する知識を教

条的に当てはめて、強引に「処理」されている。「袖の香」について直接に説明せず、つぎの和歌を参照させている注釈書がある。

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも

〔春上・三三・題不知・詠人不知〕

我が家の梅ですばらしいのは、色よりも香りのほうである。いったい、我が家の梅に誰の袖が触れてこの香りが移ったのだろうか。こういうすばらしい香を袖にたきこめてここを通り過ぎたのは誰なのだろう、ということである。我が家の梅の香りは特別である、これは、特別に繊細な感覚をもった人物が作り上げた香の傑作なのだ、その移り香なのだと断定し、その人物はだれなのだろうと疑問を提示しているところ、いかにも『古今和歌集』の和歌にふさわしい表現技巧である。

この和歌を参照すれば「昔の人の袖の香」の意味が理解できるとい

うのが、右の注釈書の立場であるが、「昔の人の袖の香」と「誰が袖ふれし」とは、和歌表現として結び付かない。

衣服から芳香を発散させる方法は、香をたきこめることだけではなかつた。この場合に即しているなら、花の咲いた橘の小枝を袖にし

ばせればよい。ありふれた香より、ずっと新鮮な印象であり、そ

う細かい心くばりは相手を引きつけたであろう。橘の花を袖にし

のばせたのは季節に合わせたものであって、注釈書

にいうところの、「この薫りはこの人」という常用の香とは別である。

咲いている橘の花はその季節だけであるが、そういう細かい配慮のあ

る女性なら、香だけに気を遣っていたはずはない。この和歌における

「袖の香ぞする」という表現は、「昔の人」の人柄や行動に関する記憶の、そのすべてを象徴している。

### 万葉集

『万葉集』には、「橘」や「花橘」を主題とする作品が非常に多い。それらのなかに、「橘歌一首」と題する大伴家持の長歌がある。

(略) 時じくの 香ぐの木の実(菓子)を かしこくも 残したまへ  
れ 国も狭に 生ひ立ち栄え 春されば 孫枝もいつつ ほとと  
ぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて 嬢子らに 土産に持た  
りみ 白たへの 袖にも扱きれ かぐはしみ 置きて 枯らしみ (略)

〔卷一八・四一一〕

初花の咲いた橘の枝を折つて土産にもたせたり、その花を摘み取つて袖に入れ(扱きれ)、よい香りを楽しんだりしている。「こきれ」は「扱き入れ」の縮約形である。「扱く」は、稲なら、粃(もみ)をしごき落とす動作であるが、花や実や、あるいは、紅葉した葉などなら、ていねいに摘み取る行為を表わす。

『万葉集』には、橘だけでなく、つぎのように、梅や馬酔木の、香り高い花を摘み取つて袖に入れてある例もある。

引き攀じて 折らば散るべみ 梅の花 袖に扱きれつ 染まば染むと  
も

〔卷八・一六六四・三野連石〕

池水に 影さへ見えて 咲きにほふ 馬酔木の花を 袖に扱きれな

〔卷二十・四五一二・大伴家持〕

### 伊勢物語

『伊勢物語』に、この和歌と緊密に結び付く挿話がある(六十段)。

昔、一人の男性がいた。「宮仕へ」に忙しくて、女性に細やかに気を配っていられたなかった時分に妻にしていた女性(家刀自)がいたが、他の男性に従つてよその国に行つてしまった。前の夫は豊前の国(現在、大分県)の宇佐宮への勅使に命じられて向かつた折、自分のもとを去つた女性が、ある国の、勅使接待役の妻になつて聞かせることを聞き、「女主人に酒杯をささせなければ酒は飲まない」と言つたので、女主人が酒杯を差し出したところ、その男性は、酒の肴のなかにあつた橘を手にとつて、つぎの和歌を口にした。

五月まつ 花橘の 香をかげば 昔の人の 袖の香ぞする

女性は、その和歌を聞いて思い出し、尼になつて山の寺にこもり、ずっとそこで暮らした。

「橘をとりて」のあとには、へそれを手に取つて、その香りをしみじみとかいだ」という行動が想定されるから(「香をかげば」、和歌を口にするまでの間にポーズがある)。

「と言ひけるにぞ思ひ出でて」とは、もはや過去のことと割り切ろうとしていたのに、その和歌を聞いたとたん、その男性と過ごしたなつかしい思い出が一度によみがえつて、ということであろう。

その女性が、この和歌からどういふ記憶をよみがえらせ、どういふ気持ちになつたのかは読者の想像にゆだねられている。彼女もまた、かつて、花橘を袖に入れてこの男性を待つていたかどうかはともかく、それと同じように、ういういしい気持ちでこの男性に接していた自分



を思い出し、いたたまれなくなったということであろうが、「思ひいでて」と叙述が中断され、余韻を残した表現になっている。

### 源氏物語

つぎに引用するのは、光源氏に愛された「明石の上」の、心にくいようすを描いた『源氏物語』の一節である。

けはひ思ひなしも心にくく、(略)琵琶をうち置きて、ただ、けしきばかり弾きかけて、たをやかに使ひなしたる撥はらのもてなし、音を聞くよりも、また、ありがたく、なつかしくて、五月待つ花橘の、花も実も具して、おし折れる香りおほゆ、

〔若菜下〕

もとなつた和歌では、花の香りだけであるのに対して、この女性の場合には、花だけでなく、照り輝く実もついた枝を、ぐっと折ったときの鮮烈な香りがする印象だ、と描写されている。花は人柄のすばらしさを、また、実は容色の美しさを象徴している。

花や実のついた枝をぐっと折れば、新鮮な香りがあたりに匂う。ただし、ここは、和歌と関連づけて、それほどすばらしい感じの女性であったと比喩的に表現されている部分であるから、想像された状態である。「明石の上」は、光源氏が不倫の罪に問われて京を追われたときに、明石(現在、兵庫県)で出会った女性であり、この和歌にいう「昔の人」にたとえるにふさわしい女性であった。

『源氏物語』のこの叙述は、『古今和歌集』の和歌の「袖の香」が、たきしめた香でなく、花をつけたまま折った橘の枝の芳香をさしているという理解に基づいている。

昔おほゆる花橘、なでしこ、薔薇、くたになどやうの、花のくさぐさを植ゑて、春秋の本草、そのなかにうちませたり 「少女」

趣の深い庭園を造つたようすを叙述した一節である。この文脈において、「昔おほゆる花橘」は、現に花が咲いていることを意味しない。

『古今和歌集』にあのように歌われた橘の樹で、その季節には「花橘」になる、ゆかり深いあの樹である。

花橘の、月影にいときはやかに見ゆる香りも、追ひ風なつかしければ、千代をならせる声もせなむと待たるるほどに、

〔若菜下〕

ここは、五月十四日の月であるから満月に近い。「千代をならせる声」は『後撰和歌集』の和歌(夏・一八六・題不知・詠人不知)に基づいており、時鳥の声をさす。

つぎの和歌の「花橘」は、時鳥が黄泉よみの国と往復するという俗信を背景にしている。

ほととぎす 君に伝てなむ 古里の 花橘は今ぞ盛りと

### 表現形成のメカニズム

これまでの検討の結果を総合するなら、この和歌は、たとえば、つぎのような順序による認識をへみそひと文字に表現したものである。たとえば、と断りを付したのは、さまざまのヴァリエーションがあるからである。①清楚な白い花を咲かせた橘の木が目にはいる(『枕草子』に描写された雨の朝のような情景)。②「花橘」は、清楚な衣装を着けた可憐な女性の姿に見える。③「花橘」は、時鳥の訪れを待っている。④作者は、「花橘」に近づいて、しみじみと香りをかぐ。すな

わち、その女性の衣装の袖から匂う香りをかく。⑤これは、昔、かよったことのある、あの女性の袖から匂ってきた、あの香りだ。

⑥あの女性は、この季節になると、香り高い橘の花を袖に入れて、わたしを待っていてくれたものだ。

嗅覚が先行すれば、①は、②橘の花の香りがほのかにただよってくる。③これは橘の花の香りだ、という過程になるが、大筋としては同じになる。

その女性との思い出を懐かしんで、毎年、庭の橘が「花橘」の状態になるのを待ち、今年もその香りをかいで感慨にふけている、ということなら、右に例示した順序の認識と①から③までが入れ替わるが、それはそれで、正統の表現解析である。そういうもろもろのヴァリエーションを、 $(A+B)$  や  $(A \times B)$  として総合したのが、すなわち、この和歌の表現である。

「昔の人の袖の香ぞする」とは、時間を超えて、心が昔に戻っていることを表わしている。そして、それ以来、長い年月を経た現在の現実がある。あのすばらしい女性は、今ごろ、どこでどうしているのだろうか、しあわせな結婚生活を送っているだろうかとか、そういう、明示的には表現されていない感懐は、読者がそれぞれの体験に重ね合わせて自由に補えばよい。

対象が文学作品のテキストであるから、あえて微妙なところまで立ち入ったが、言語表現としての解析は、このあたりが限界である。しかし、そういうたぐいの補いがなければ、文学作品としての鑑賞にはならないはずである。

【後記】論文一般の論述形式によらず、専門用語の使用を抑制して叙述したのは、文学研究の資料として仮名文テキストを取り扱う研究者にも、小論の方法について理解を得たいと考えたからである。

筆者の意図は、和歌表現を包括的に解析する方法を学的レベルにおいて実践的に提示することにある。その方法は antagonistic であり、heterodox でもあるが、その事実だけをもって authenticity が否定されることはないはずである。